

中南部 12

— 比恵遺跡群第 138 次・149 次、那珂遺跡群第 158 次調査の報告 —

2021
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が多く残されており、これを後世に伝え残していくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の都市部周辺における開発事業の増加に伴い、止むを得ず失われていく埋蔵文化財の発掘調査を実施し、失われていく遺跡の記録保存に努めているところであります。

本書は、福岡市中南部地区3か所で行われた発掘調査の成果を報告するものであります。

本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていくうえで活用されるとともに、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大なご協力とご理解を賜りました各原因者の皆様をはじめ、多くの方にご協力とご理解を賜りましたことに対し、心からの謝意を表します。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例 言

1. 本書は、福岡市内における民間受託事業および国庫補助対象事業である個人事業等の開発行為に先立って、福岡市教育委員会が平成27（2015）年度・28（2016）年度にかけて実施した中南部地区（比恵・那珂遺跡群）の発掘調査報告書である。
2. 本書の編集は荒牧宏行と協議の上、本田浩二郎があつた。
3. 本書に使用した遺構実測図は荒牧宏行、遺物実測図は池田祐司・中尾祐太が作成した。
4. 本書で用いている方位は記載がない限り磁北であり、真北より $6^{\circ} 20'$ 西偏している。
なお、本書に使用している座標は、世界測地系を用いている。
5. 本書に収録されている各調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

目 次

I.はじめに	2
II.遺跡の立地と環境	3
III.1513 比恵遺跡群第138次調査 (HIE138)	5
IV.1529 那珂遺跡群第158次調査 (NAK158)	13
V.1643 比恵遺跡群第149次調査 (HIE149)	25

I. はじめに

1.発掘調査の経緯

福岡市教育委員会では、福岡市域内の建築確認申請のうち、周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれているものについては、事前に確認調査等を行い埋蔵文化財の有無についての確認を行っている。現地での確認調査の結果、建物基礎や建築に伴う土木工事が埋蔵文化財に対して影響が及ぶと判断された場合は、設計変更や盛土による保護層確保等の保存のための協議を行い、埋蔵文化財への影響を最小限に留め現状保存の処置を行っている。しかしながら、工事により止むを得ず破壊される場合については記録保存のための発掘調査を事前に行っている。本書において報告を行う比恵・那珂遺跡群では、埋蔵文化財が現在の地表面から比較的浅い地点で検出される事例が多く、掘削深度が浅い工事についても埋蔵文化財への影響が避けられないため、発掘調査を実施している事例が多い。

2.調査体制（令和2年度 整理・報告年度）

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	星子 明夫
調査総括	福岡市経済観光文化局文化財活用部	部長	田代 和則
		埋蔵文化財課長	菅波 正人
		埋蔵文化財課 第2係長	藏富士 寛
調査庶務		文化財活用課管理調整係	松原加奈枝

なお、調査当時の調査体制については各章に記載した。また、調査期間中には原因者をはじめ多く方に配慮を賜った。記して感謝の意を表す。

遺跡名	比恵遺跡群	調査次数	第138次	遺跡略号	HIE
調査番号	1513	分布地図図幅名	37 東光寺	遺跡登録番号	0127
申請面積	591m ²	調査実施面積	303m ²	調査種別	民受・国補
調査地	博多区山王2丁目44番3、45番			事前審査番号	26-2-914
調査期間	2015（平成27）年6月29日～2015（平成27年）年9月9日				
遺跡名	那珂遺跡群	調査次数	第158次	遺跡略号	NAK
調査番号	1529	分布地図図幅名	37 東光寺	遺跡登録番号	0085
申請面積	521m ²	調査実施面積	231m ²	調査種別	民受・国補
調査地	博多区那珂一丁目496番			事前審査番号	27-2-440
調査期間	2015（平成27）年11月9日～2016（平成28年）年1月15日				
遺跡名	比恵遺跡群	調査次数	第149次	遺跡略号	HIE
調査番号	1643	分布地図図幅名	37 東光寺	遺跡登録番号	0127
申請面積	195m ²	調査実施面積	97m ²	調査種別	民間受託
調査地	博多区博多駅南4丁目123-1			事前審査番号	28-2-548
調査期間	2017（平成29）年3月1日～2017（平成29年）年3月31日				

II. 遺跡の立地と環境

比恵・那珂遺跡群は、福岡平野の中央部を北流して博多湾に流れ込む那珂川と御笠川に挟まれた中位段丘上に広がる（Fig.1参照）。この段丘地形は比恵・那珂遺跡群付近では幅が広くなるが、南側に接する五十川遺跡群付近では幅が狭くなっている。比恵・那珂遺跡群の間には浅い谷状地形が存在しており、これを境に遺跡範囲及び名称が分けられている。比恵遺跡群と東側の山王遺跡も谷地形で両されているが、遺構の分布状況などから、これらの遺跡は本来は一連の遺跡であることがわかっている（Fig.2参照）。なお、包蔵地として現在登録されている面積は、那珂遺跡群が805,437m²、比恵遺跡群が650,003m²、山王遺跡が124,533m²となり、あわせて1,580,000m²の広大な範囲に弥生時代から中世までの遺構群が展開していることがこれまでの調査で明らかとなってきている。

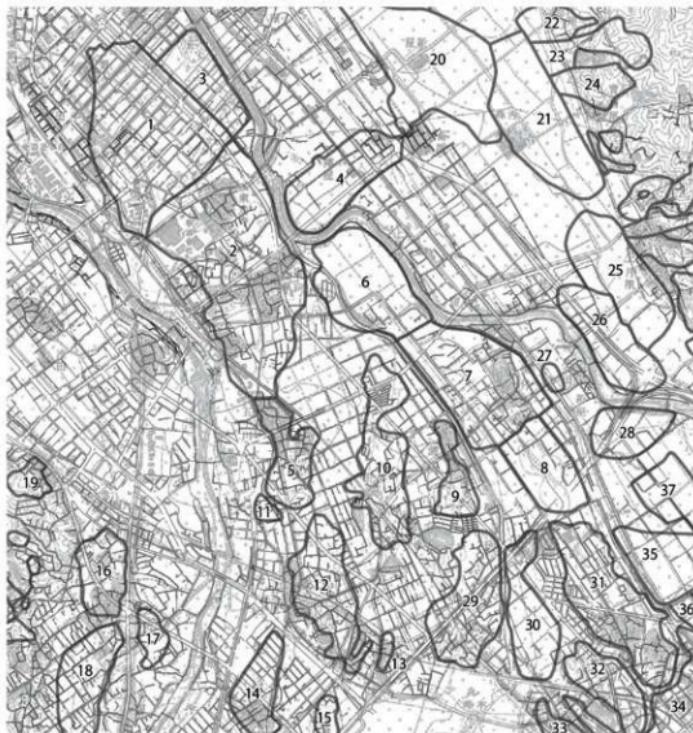


Fig.1 中南部地区遺跡分布図 (S=1/25,000)

1 比恵遺跡群	9 諸岡B遺跡	17 三宅B遺跡	25 下月隈C遺跡	33 南八幡遺跡
2 那珂遺跡群	10 諸岡A遺跡	18 三宅C遺跡	26 立花寺B遺跡	34 麦野C遺跡
3 山王遺跡	11 井川A遺跡	19 野間D遺跡	27 板付東遺跡	35 井相田C遺跡
4 東那珂遺跡	12 井川B遺跡	20 佐居遺跡	28 井相田D遺跡	36 井相田E遺跡
5 五十川遺跡	13 井川C遺跡	21 下月隈D遺跡	29 笹原遺跡	37 仲島遺跡
6 那珂君休遺跡	14 横手遺跡群	22 久保田遺跡	30 三筑遺跡	
7 板付遺跡	15 寺島遺跡	23 席田大谷遺跡	31 麦野A遺跡	
8 高畠遺跡	16 大糀E遺跡	24 宝満尾崎遺跡	32 麦野B遺跡	

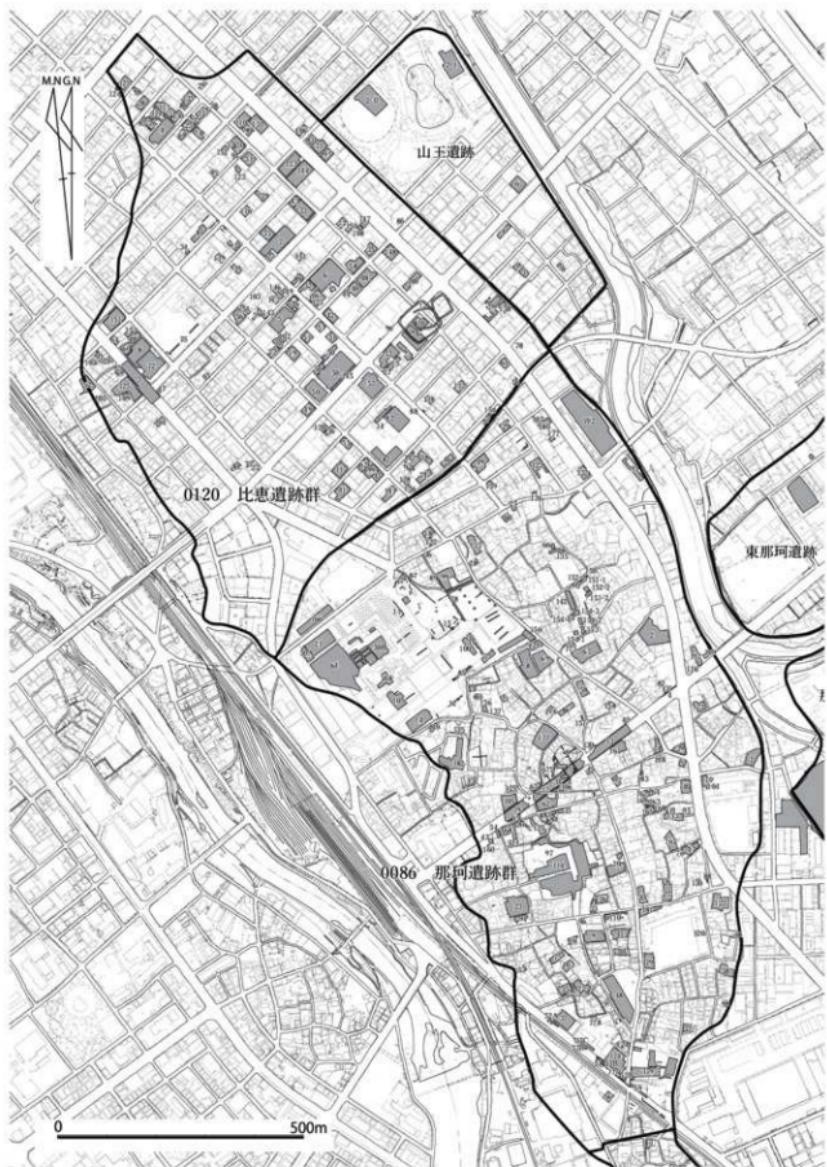


Fig.2 比恵・那珂遺跡群調査地点位置図 (S=1/8,000)

III 1513 比恵遺跡群第138次調査 (HIE138)

1. 調査に至る経緯

平成27年1月20日付で福岡市博多区山王2丁目44番3、45番地内における埋蔵文化財の有無についての照会を受理した（事前審査番号26-2-914）。これを受けて、埋蔵文化財審査課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に含まれていることや対象地周辺で発掘調査が実施されていること等を受け、平成27年5月25日に現地での確認調査を行った。

確認調査の結果、現地表下80cmで中世の土坑などの遺構が検出された。遺構の保全等に関して申請者と協議を行ったが、共同住宅建設工事による埋蔵文化財への影響は回避できないと判断されたため、工事が行われる範囲について記録保存のための発掘調査を実施した。発掘調査は条件整備の整った2015（平成27）年6月29日に着手し、同年9月9日に終了した。

2. 調査体制

発掘調査にあたっての組織は以下の通りである（平成27年度）。

調査委託	個人	教育長	酒井龍彦
調査主体	福岡市教育委員会	課長	常松幹雄
調査総括	福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課	調査第2係長	榎本義嗣
調査庶務	埋蔵文化財審査課	管理係	川村啓子
調査担当	埋蔵文化財調査課	調査第2係	荒牧宏行

3. 調査の記録

比恵遺跡群第138次調査地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群範囲内南東部に位置す

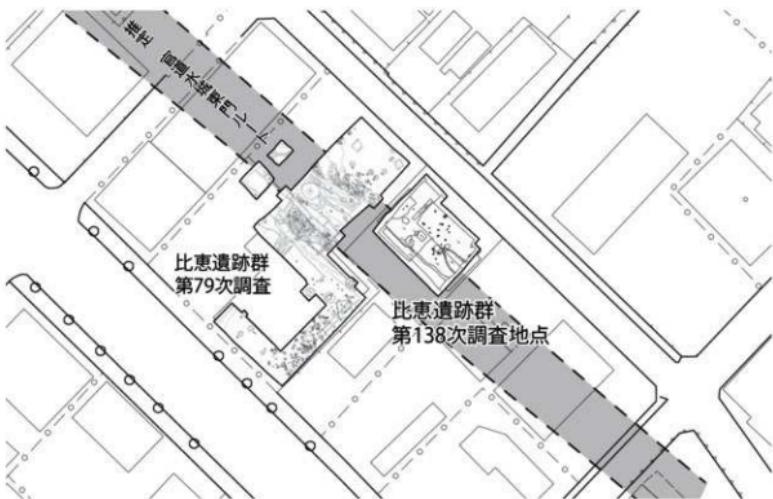


Fig.3 比恵遺跡群第138次調査地点位置図 (S=1/1,000)

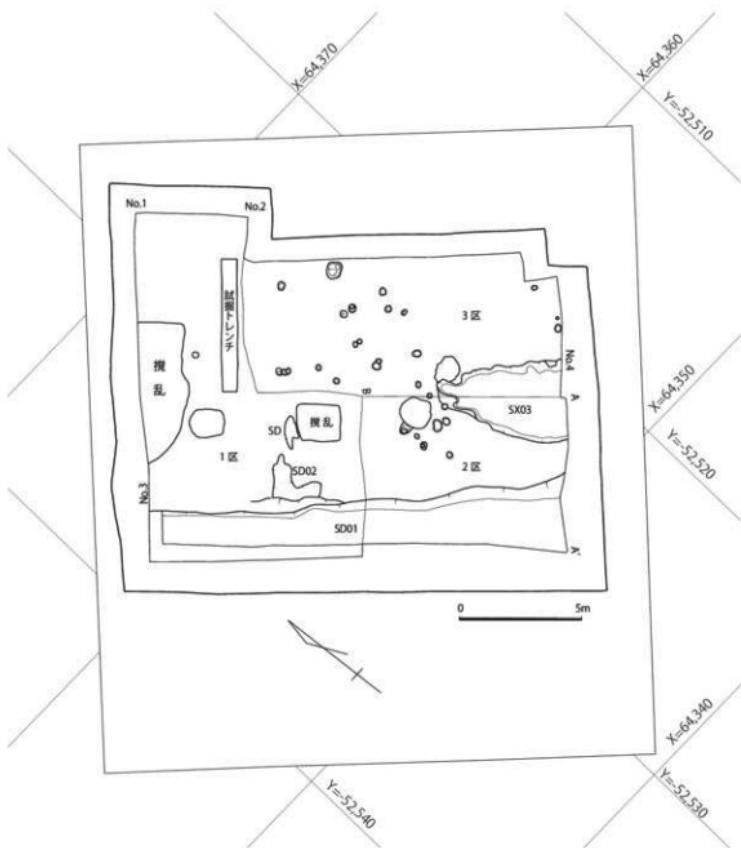


Fig.4 比恵遺跡群第138次調査遺構実測図 (S=1/200)

る。北西側隣地では第79次調査が実施され、官道水城東門ルート（以下、官道）の西側側溝の一部が確認されている。確認調査の成果に基づき、現地表面から80cm程度の造成土及び厚さ25cm程度の旧水田耕作土を除去した標高5.0m前後の鳥栖ローム層面で遺構検出作業を行った。対象地の現地表面の標高は6.0m、北西側隣地は標高6.5mを測り、対象地が一段下がる地形となる。なお、調査区南西側で確認された溝遺構（SD01）は、現在の区画と同方向に延伸し昭和初期の地図に記載されている近現代の用水路である。昭和初期の区画整理時に埋め戻されたものである。

北側隣地の第79次調査地点の成果から、本調査地点内西側において官道路面が北東方向から南西方向に延伸すると推測されていたが、道路廃絶後の中世後半期に水田化され、すでに失われていたことが確認された。なお、官道東側側溝については第79次調査地点においても、後世の水田化に伴う水路掘削により失われているため確認されていない。

調査は残土処理の都合から対象地を三区分し、北側を1区、南西側を2区、南東側を3区として順次作業を行った。調査では柱穴・ピット状遺構・水路などの遺構を検出した。遺物はコンテナケース1箱分の土師器・須恵器・貿易陶磁器等の細片が出土した。

遺構と出土遺物

以下に各遺構と出土遺物についての説明を行う。

SD01 (Fig.1-5)

調査区南西際で検出された溝状遺構で、現在の区画に並行する近現代の用水路が重複してほぼ同位置に掘削される。溝の位置は官道水城東門ルートと重複するが官道に伴う遺構ではなく、中世後半期から昭和初期の区画整理までの土地利用の区画を示す遺構である。

Fig.5に調査区の埋没状況および各遺構の堆積状況を土層断面として示しているが、調査区全域で中世後半期段階の開墾により大きく改変され平坦化されたことがわかる。官道が再整備され使用された12世紀以降に水田として利用されるが、その際にSD01は水田経営のための用水路として掘削されたと考えられる。官道と軸を同一とするのは、官道自体が周囲の土地利用の基軸となったためと考えられる。調査では溝東側の立ち上がりのみを確認し、正確な幅は不明確であるが3m以上の幅で掘削されたことがわかる。周囲の遺構検出面から溝底面までは70cm程度の深さを測る。溝の埋土からは白磁碗や国産陶器類をはじめ弥生土器等が出土した。出土遺物をFig.6に示した。



Ph.1 調査区北西部（1区）全景（南西から）



Ph.2 1区全景（南から）



Ph.3 調査区南際（2区）SD01全景（北から）



Ph.4 調査区南東部（3区）全景（西から）

Fig.6-1は白磁玉縁碗である。復元口径は15.0cm、残存高は2.4cmを測る。2は同安窯系青磁碗で、内面に櫛描文と片切彫りによる装飾が施される。3は白磁碗高台部である。外面下半部は露胎とし、高台は削り出す。4は白磁碗高台部である。体部下半まで施釉し、以下は露胎とする。5は国産陶器擂鉢口縁部片で、色調は茶褐色を呈する。6は近世青磁碗で、釉調は濃い灰緑色を呈する。7は弥生土器壺口縁部片、8は弥生土器甕口縁部片である。いずれ遺物も著しく摩滅しており、近隣に存在した遺構から流入したものと考えられる。これらの出土遺物はSD01の時期を直接示すものではなく、流入時期や周辺の開発時期を間接的に示すものといえよう。

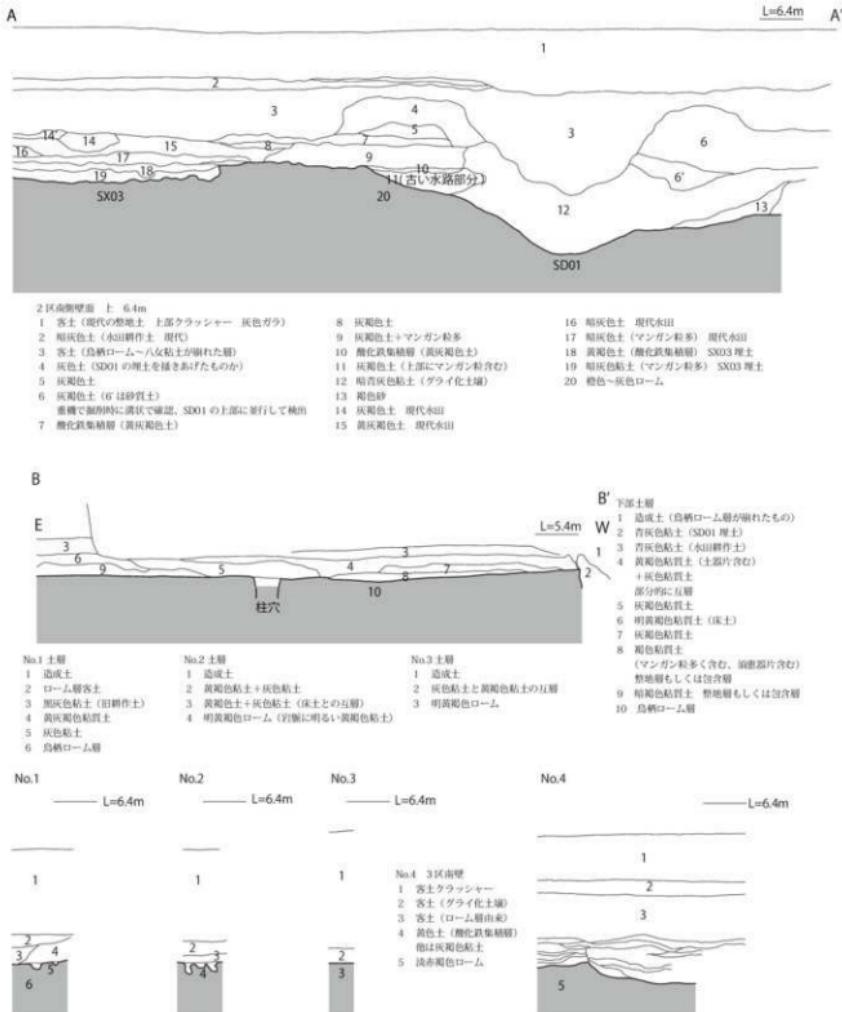


Fig.5 比恵遺跡群第138次調査地点 土層断面実測図 (S=1/40)

SD02 (Fig.4)

調査区1区南西部で検出した溝遺構である。大部分が開墾による削平により失われており、遺構底面付近のみが残存しており、検出面から底面までは5～7cm程度の深さを測る。推定官道ラインに直交するように検出されるが、関連性は不明確である。遺構埋土から陶器片などが出土した。

出土遺物をFig.6に示した。9は青磁碗で、内面見込みに重ね焼きの目跡が残る。

SX03 (Fig.4・5)

調査区2・3区で検出した平面が楕円形を採る土坑である。この遺構も大きく削平を受けているため遺構下部のみが検出されたに過ぎず、検出面から遺構底面までは10cm程度の深さとなる。遺構の埋土は上面に水田が存在するため酸化鉄集積により影響を受けている。遺構の主軸がSD01とほぼ同軸を探っていることから、中世後半期以降に使用された水田導水部の痕跡である可能性が考えられる。埋土から土師器や陶器片などが出土した。

出土遺物をFig.6に示した。10はSX03出土の青磁碗で、釉調は深い灰緑色を呈する。

その他の出土遺物

11は2区壁出土の染付碗で、外面口縁部下にコバルトブルーの装飾が見える。胴部の立ち上がりはきつく、外反しない碗である。



Ph.5 SD01, SX03上層（北から）



Ph.6 3区南壁上層（SX03付近 北から）



Ph.7 3区地山（官道路面下）状況（北から）



Ph.8 3区地山（官道路面下）

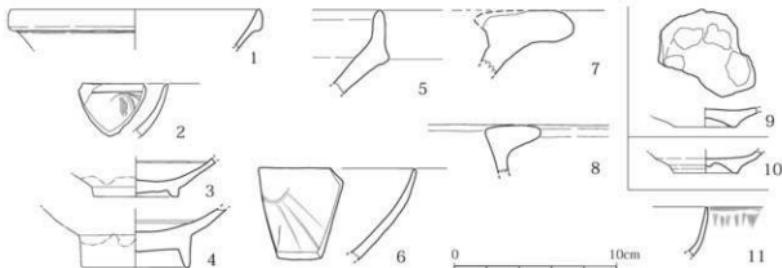


Fig.6 比恵遺跡群第138次調査 出土遺物実測図 (S=1/3)

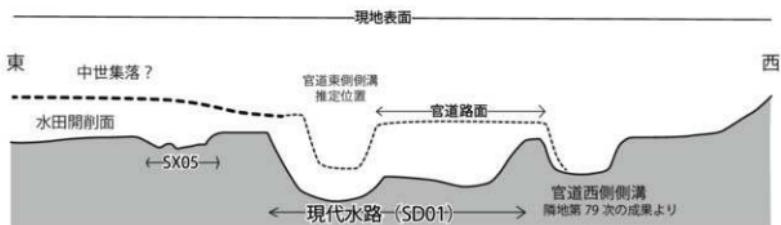


Fig.7 比恵遺跡群第138次調査地点 土地利用模式図（東西方向）

4.まとめ

本調査地点は比恵遺跡群が広がる低位段丘の北東側緩斜面上に位置し、東側の山王遺跡と地形を画する浅い谷地形西側に面していたと考えられる。隣接する第79次調査地点の成果からも調査地点付近で東側に一段落ちる地形復原がなされており、本調査地点の現地表面標高や遺構面となる鳥栖ローム層上面の標高は西側の第79次調査地点と比べると50～70cmほど低くなっている。官道整備に当たって切り通し等の大規模な土木作業を避け、掘削作業量を比較的抑えられる場所を選定し道路敷設を計画したことが想定できる。

調査地点は官道水城東門ルートの推定位置に位置するが、本調査地点では路面および側溝は確認されなかった。第79次調査および本調査の成果を基に官道路面整備高および側溝底面掘削高と遺構検出面を比較すると、推定道路位置には近現代に水路が重複して掘削されており、水路掘削の際に失われたものと判断される(Fig.7参照)。調査では調査区東側で、12世紀以降に掘削されたと考えられる柱穴などが確認された。水田耕作土は柱穴が確認された層位の上に堆積しており、集落廃絶後に開墾され水田化したものと考えられる。官道に伴う明確な遺構は今回調査では確認されなかつたが、古代の須恵器と12世紀代の貿易陶磁器などが出土している。これらの遺物が属する二時期は周辺調査成果から判明している官道敷設時と再整備後の再利用時の時期に符合しており、今回調査もこれを追認する成果が得られたといえよう。

官道水城東門ルートについて (Fig.8)

官道水城東門ルートは大宰府から水城東門を通り博多方向へと延びる道路で、福岡市内では南から博多区井相田C・E遺跡、高畠遺跡、板付遺跡、那珂君体遺跡、那珂遺跡群、比恵遺跡群と直線的に並ぶ遺跡内の調査で確認されている。官道の主たる用途は都と地方を結ぶ通信・交通網であり、道幅は9～12m前後を測り、現代の二車線道路より広い規格となる。これは単に通信・交通網だけではなく、有事の際には兵站が移動する軍事施設という側面を持っているためである。「遠朝廷」と称された大宰府は北部九州の要衝であったことから、都と直結した駅路である山陽道・西海道が整備され、北部九州では大宰府を基点として各郡を結ぶ伝路が整備された。これまでの発掘調査で確認されている道路遺構は幅11～12mであり、時期ごとに異なる規格で道路幅が整備されたことが知られている。

東門ルートに並走する道路として西門ルートがあり、こちらは大宰府より水城西門を出て鴻臚館へと続くように整備された道路である。

東門ルートは断続的ではあるが各遺跡で実施された調査により直線的に確認されているが、その終着点にどのような施設が存在していたのかは知られていない。現在の調査成果から延伸すると、博多遺跡群の南東付近に到達すると想定されるが、博多遺跡群内の調査においてもこれに関連する遺構は確認されていない。その用途から、現在の祇園町交差点付近で想定されている「官衙城」へと連接するか、博多遺跡群南側を東西方向に走る西海道に直接繋がるものと推測することができるが、明確な遺構として確認されておらず判然としていない。

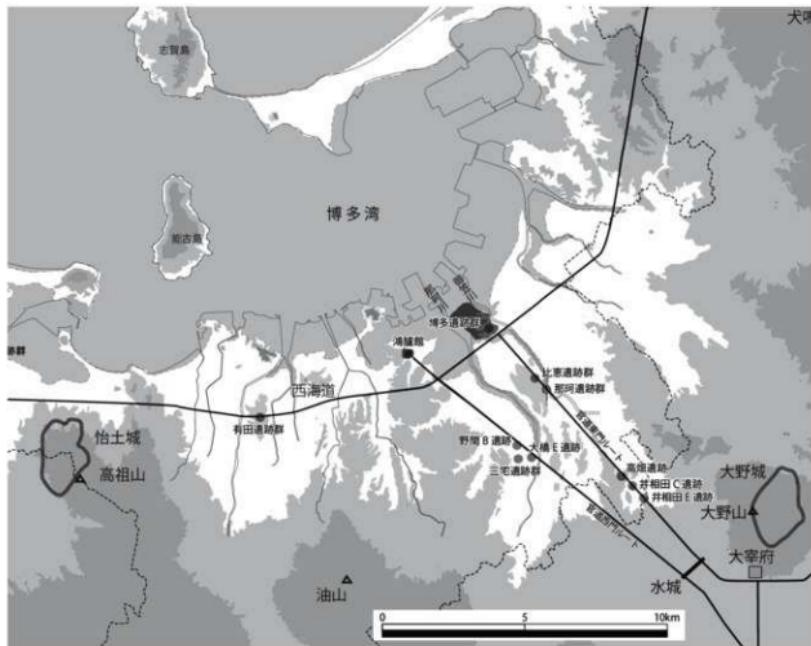


Fig.8 福岡市内古代官道復元図および確認遺跡分布図

IV 1529 那珂遺跡群第158次調査 (NAK158)

1. 調査に至る経緯

平成27年7月31日付で福岡市博多区那珂一丁目496番地内における埋蔵文化財の有無についての照会を受理した（事前審査番号27-2-440）。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群内に含まれていることや平成11年度に事前審査申請（11-2-500・501）を受けており、その際に現地での確認調査を実施していた。当時の確認調査では現地表面下35cmの地点で弥生時代から古墳時代にかけての遺構が検出されている。

申請地内で予定されていた店舗建設については盛土による保護層確保の協議を行い、遺構は現状保存の処置をとることとなり発掘調査は回避された。しかしながら、今回の申請は大規模な基礎工事を伴う共同住宅であったことから、建設工事による埋蔵文化財への影響は回避できないため、工事が行われる範囲について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は条件整備の整った2015（平成27）年11月9日に着手し、2016（平成28）年1月15日に終了した。

2. 調査体制

発掘調査にあたっての組織は以下の通りである（平成27年度）。

調査委託	個人		
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	酒井龍彦
調査総括	福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課	課長	常松幹雄
		調査第2係長	榎本義嗣
調査庶務	埋蔵文化財審査課	管理係	川村啓子
調査担当	埋蔵文化財調査課	調査第2係	荒牧宏行



Fig.9 那珂遺跡群第158次調査地点位置図 (S=1/1,000)

3. 調査の記録

那珂遺跡群第158次調査点は、遺跡範囲の南側に位置し現況は北東方向に緩やかに傾斜する宅地である。対象地内の最も高い地点は南西隅部で標高7.7m、北東隅部7.2mで比高差50cmを測る。周辺では北西側で第58次、南西側で第42次調査等が実施されている。歴史的都合から調査区を三分割し、順次作業を行った。調査では古墳時代後期の竪穴住居5軒以上、堀立柱建物5棟以上、中世後半期から戦国期にかけての溝遺構と段地形、時期不明の土坑や建物としてはまとめきれない柱穴、



Fig.10 那珂遺跡群第158次調査地点遺構実測図 (S=1/100)

ピット群などの遺構を検出した（Fig.10）。

竪穴住居は一辺4～5mを測る方形住居で、後世の開発により上部が大きく削平を受けているため検出面から底面までは10～30cm程度しか遺存していない。住居内にはカマドが設置されているが廃絶時に破壊されていた。ほぼ同位置で複数回の建て替えが行われており、正確な住居数は把握が難しい。中世後半期から戦国期の遺構は、周辺の調査区においても確認されており、周辺に大規模な濠を巡らせた屋敷地が存在している可能性が指摘されている。戦国期には博多に勢力を伸ばした戦国武将大内氏の家臣団が那珂・五十川一帯に居を構えていたとの記録があり、大規模な造成工事の痕跡である段落ち遺構（SD01・07）等はこれに関連する遺構である可能性が想定できる。

調査ではコンテナケース7箱分の土師器、須恵器をはじめ中世後半期の陶磁器類等が出土している。

遺構と出土遺物

以下に検出した遺構と出土遺物についての説明を行う。

竪穴住居

SC02（Fig.10-11）

調査区中央部西側で検出した竪穴住居で、6棟以上の住居が重複している。SC02はこの切り合いの中で最終的に掘削された住居で、平面形は方形で一辺3m前後に復原できる。南側及び東側は他の遺構や攪乱により失われている。大きく削平を受けているため貼床面での検出となった。SC02に伴う遺構として検出位置と主軸方向からカマド7が想定できる。住居埋土からは須恵器、土師器等が出土するが、いずれも細片資料である。



Ph.9 調査区西半（1区 北東から）

出土遺物をFig.16に示した。1～3は須恵器壺口縁部片である。4、5は須恵器壺蓋である。6は須恵器壺口縁部片である。7、8は土師器甕の口縁部片である。8は内外器面に調整痕が残るが摩滅によりほとんどが失われている。

カマド7 (Fig.12上段)

SC02東側壁中央部付近に設置されたと考えられるカマドで、上部構造は住居廃絶時に破壊される。カマド奥側中央部には支脚として転用された逆位の土師器高壺が据えられ、周囲には焼土や炭化物を多く含む褐色土が堆積する。カマド壁体は八女粘土で成形されており、焼土・炭化物層を包むように堆積する。出土物をFig.16に示した。31はカマドの支脚に転用されていた土師器高壺である。壺部口径は13.4cm、残存高は9.2cmを測る。器面全体が被熱により荒れ、脚部端部は欠損する。

SC04 (Fig.11)

調査区中央部西側で検出したやや大型の竪穴住居で、平面形は方形に復原できる。一辺5.3～5.7m前後に復原できる。南東側はSC08や攪乱により失われている。住居北側では住居壁の立ち上がりが確認でき、検出面から床面までは30cm程度残存する。SC04に伴う遺構としてカマド5と主柱穴が検出された。主柱穴間の間隔は2.5～2.7mで、床面から柱穴底面までは70cm程度の深さを測る。のちのSC02と重複するため住居埋土からは土師器や須恵器の細片資料のみ出土する。



Ph.10 調査区西半中央部（1区北東から）



Ph.11 SC02, 04完掘（貼床土除去 北東から）



Ph.12 調査区北東部（2区 南から）



Ph.13 調査区南東部（3区 南西から）

カマド5 (Fig.12下段)

SC04に伴うカマド遺構であり、住居北東側壁中央部に設置される。SC02構築時、もしくは住居廃絶時に壁体は破壊される。直径50cm程度の掘り込み内にカマド壁体と使用された八女粘土や焼土、炭化物を含むロームブロック等が堆積する。カマド内堆積物からは土師器や須恵器等が出土する。

出土物をFig.16に示した。29は須恵器环蓋、30は土師器甕である。いずれも細片資料となる。

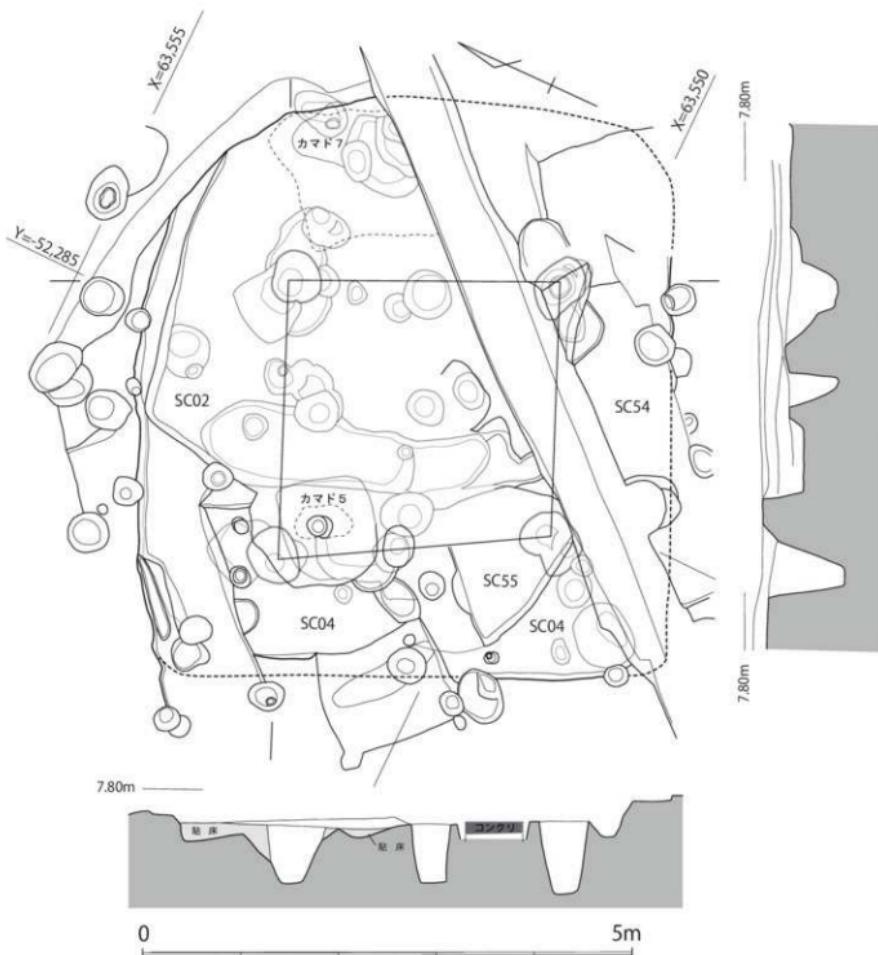


Fig.11 SC02・04遺構実測図 (S=1/50)

SC08 (Fig.10-13)

調査区中央部南側で検出された竪穴住居で、東側でSC04を切り、北東側は中世後半期の造成により失われている。残存部から平面形は方形で、一辺3m前後と想定される。検出面から住居床面までは10cm程度の残存で床面には貼床部が確認できる。カマドは住居北東側壁中央部に設置される。廃絶時の祭祀行為により壁体上部は破壊されているが、内部からは正位の甕と焼土・炭化物等が検出される。住居外には煙道の痕跡が残り、内部には焼土や炭化物を多く含む暗褐色粘質土等が堆積していた。主柱穴は間隔1.7m前後を測り、床面から柱穴底面までは60cm程度の深さを測る。住居埋土及びカマド周辺から土師器や須恵器等が出土した。

出土物をFig.16に示した。9、10は須恵器壺、11は須恵器壺蓋である。12は須恵器壺か。13～18は土師器甕でカマド周辺および焚口付近から出土した。いずれも摩滅により外器面の調整痕は失われている。内面には削り痕跡が残る。19～25は土師器甕でカマド内埋土から出土した。26は土師器高環部分でカマド出土。27はカマド裾部出土の土師器高環である。壺部と脚部の接合箇所が欠失する。28は瓦器椀である。

この他にも竪穴住居と考えられる遺構を複数検出した。住居全体の平面形は既に失われているため全容は不明確であるが、SC02やSC04等とほぼ同時期の方形竪穴住居群と考えられる。検出時に竪穴住居の一部として遺構番号を付与した遺構について以下に説明を行う。



Ph.14 カマド7壁体と焚口焼土（南西から）



Ph.15 カマド7壁体（奥）と焼土（手前断面）



Ph.16 SC02内カマド5検出状況（東から）



Ph.17 カマド5断割り（南から）

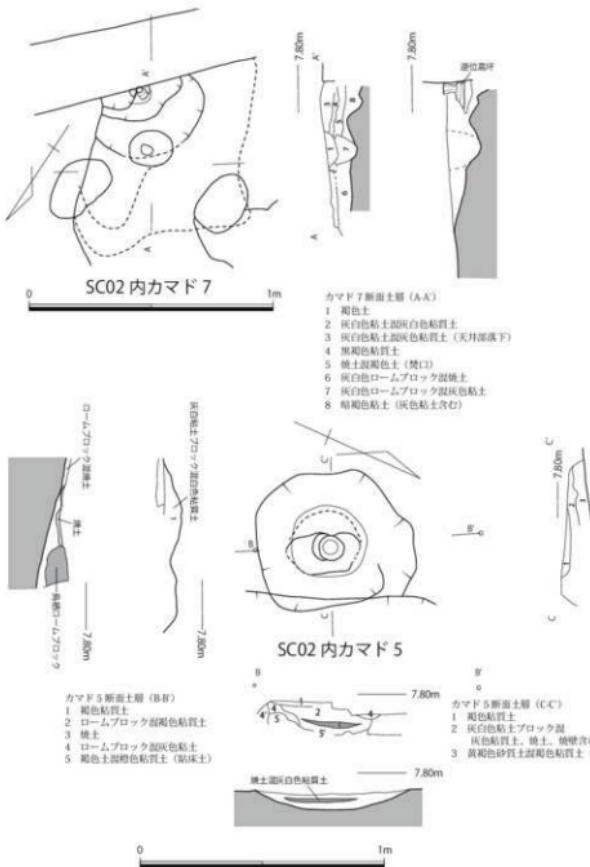


Fig.12 SC02内カマド5・7 遺構実測図 (S=1/20)

SC54 (Fig.10)

調査区中央部南側、SC02・04周辺で検出した住居で、住居南側壁の一部のみ検出された。住居に伴うカマドや主柱穴は確認されなかった。

SC55 (Fig.10)

調査区中央部南側、SC02・04内で検出した住居で、住居南西側壁隅部のみを検出した。前述のSC54と同様に住居に伴うカマドや主柱穴は確認されていない。建替時に破壊されたものと考えられる。

SC99 (Fig.10)

調査区北側で検出された住居で、北側壁の一部のみ検出された。検出された壁の方向からSC02と同方向の主軸を持つと考えられる。

られる。検出面から床面までは5~10cm程度の深さとなる。住居に伴うカマド遺構や主柱穴などは未検出、もしくは調査区外に位置するものと考えられるが、住居が検出された範囲は中世後半期の造成や後世の擾乱により大きく地形変更を受けているため消失している可能性が高い。検出面から底面までは5cm程度で、埋土からは土師器の細片資料などが出土する。

SC134・135 (Fig.10)

調査区東端部で検出した住居で、住居北西側壁一部のみが検出された。住居に伴うカマド遺構や柱穴などは未検出、もしくは調査区外に位置するものと考えられるが、住居が検出された範囲は中世後半期の造成や後世の擾乱により大きく地形変更を受けているため消失している可能性が高い。検出面から底面までは5cm程度で、埋土からは土師器の細片資料などが出土する。

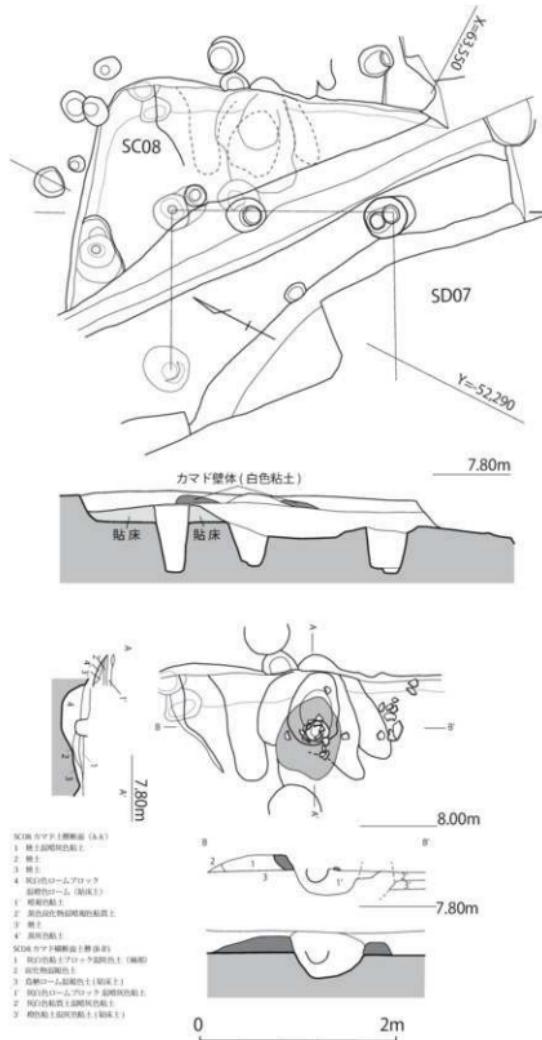


Fig.13 SC08 住居内カマド遺構実測図 (S=1/50)

SX126 (Fig.10-14)

調査区北西側で検出した隅丸長方形の土坑で、残存長軸160cm×短軸50cm、検出面から底面までは50cmを測る。断面形はほぼ方形に掘削されており土坑墓と考えられる。

出土遺物をFig.17に示した。44は弥生土器複合口縁壺の口縁部である。

土坑・ピット

調査では竪穴住居の他に多くの土坑やピット等も検出した。以下では重要と考えられる遺構について説明を行う。

SX06 (Fig.10-14)

調査区東端部で検出した隅丸長方形の土坑で、長軸120cm×短軸45cm、検出面から底面までの深さ30cmを測る。底面は北側に向て傾斜を持ち、土坑底面北端は一段掘り下がる。「足元堀込土壙」とされる土坑墓の可能性が考えられる。

SK123 (Fig.10-14)

調査区中央部北側で検出した長方形土坑で長辺120cm×短辺90cm、検出面から底面までは40cm程度の深さを測る。土坑底面中央には直径20cm程度の柱穴が伴い、深さは10cm程度となる。出土遺物をFig.17に示した。42は小型の土器器表である。

SK93 (Fig.10-14)

調査区北西側で検出した梢円形土坑で、長軸150cm×短軸130cm、検出面から底面までは70cmを測る。底面のほぼ中央部に直径40cm程度の柱痕が残る。出土物をFig.17に示した。43は須恵器環である。

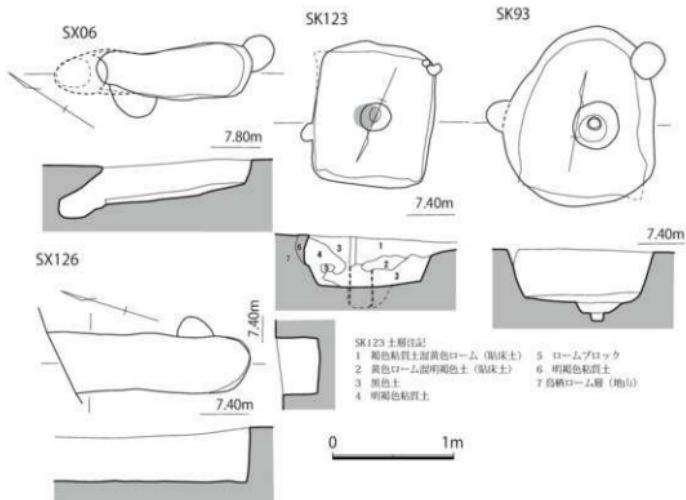
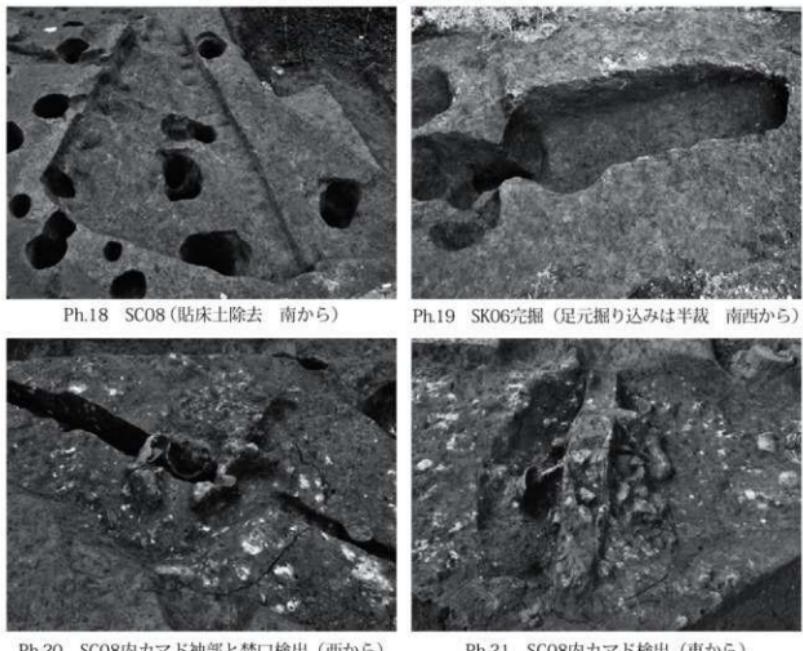


Fig.14 那珂遺跡群第158次 検出遺構実測図 (S=1/40)



Ph.18 SC08(貼床土除去 南から)

Ph.19 SK06完掘(足元掘り込みは半裁 南西から)

Ph.20 SC08内カマド袖部と焚口検出(西から)

Ph.21 SC08内カマド検出(東から)

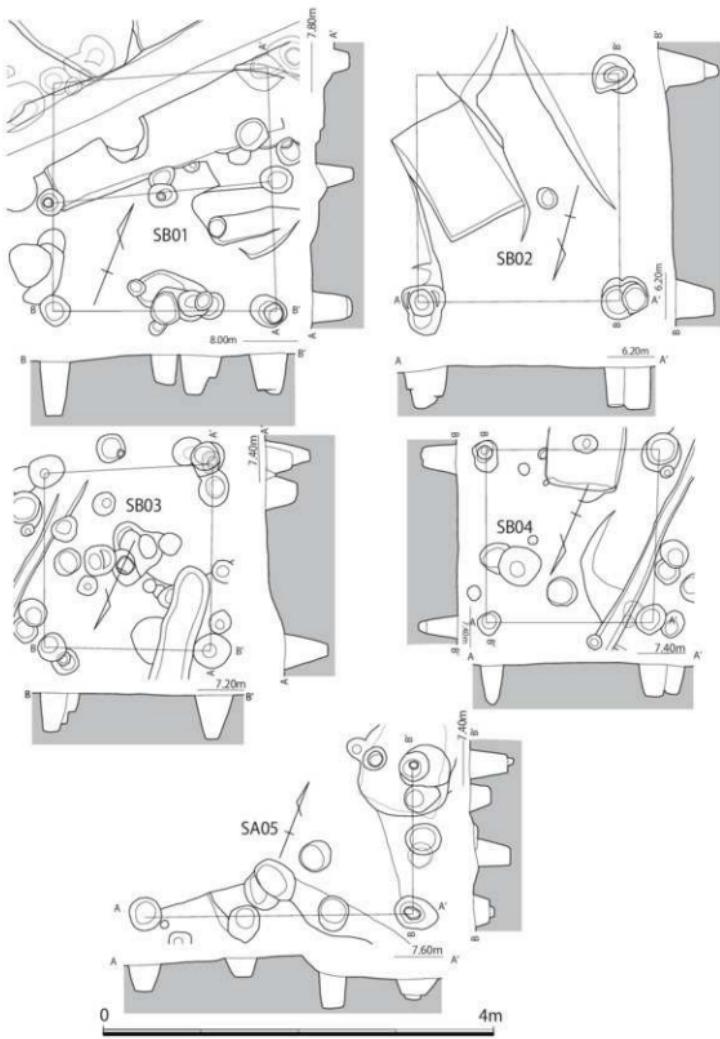


Fig.15 那阿遺跡群第158次 堀立柱建物等実測図 (S=1/50)

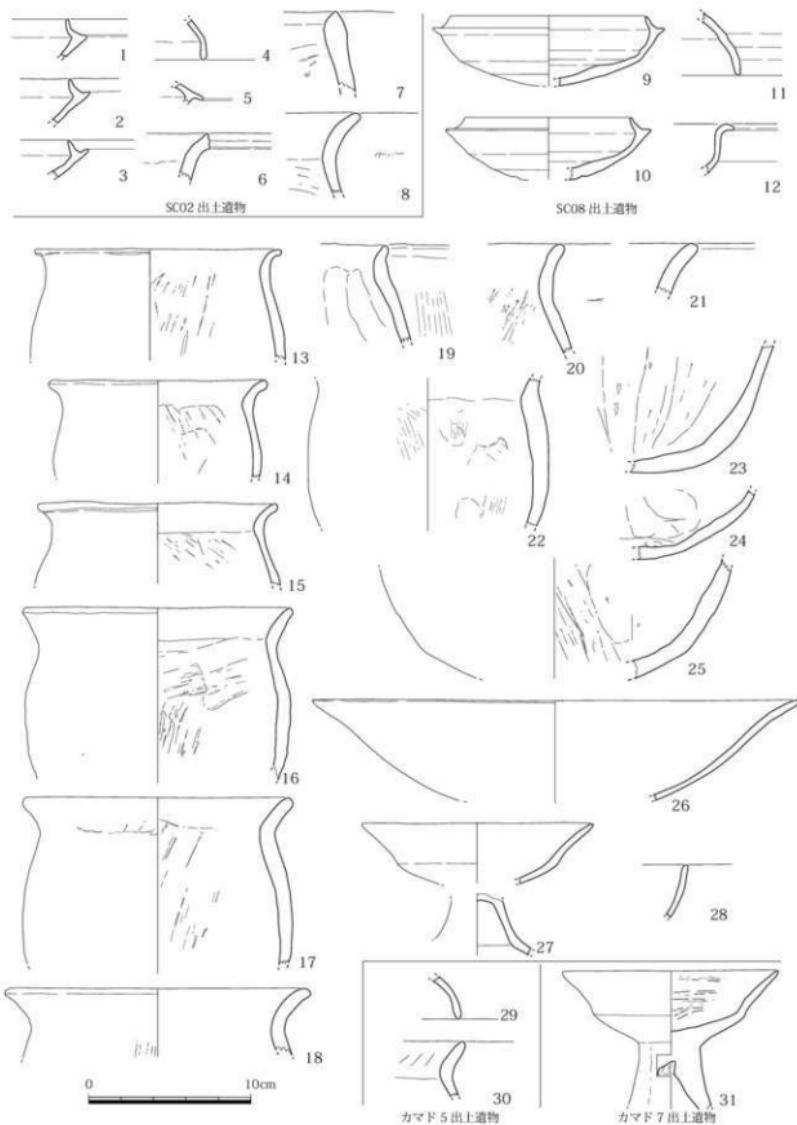


Fig.16 比恵遺跡群第138次調査遺構実測図 (S=1/3)

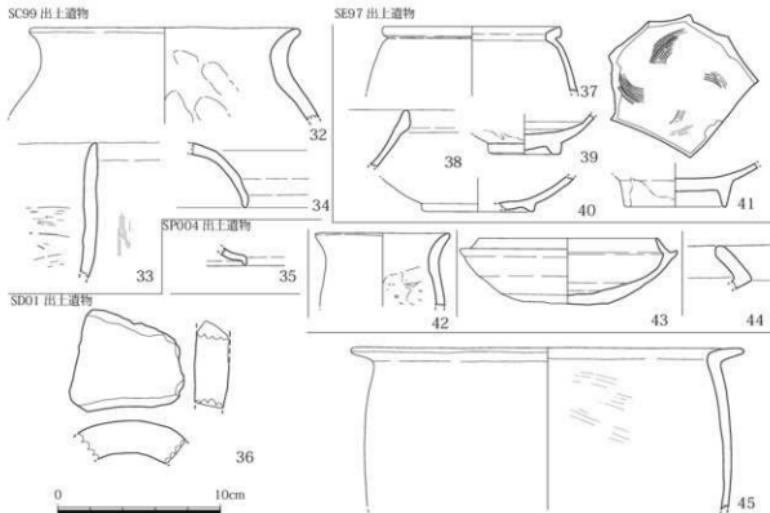


Fig.17 那珂遺跡群第158次調査出土遺物実測図 (S=1/3)

SP056 (Fig.10)

SC02のカマド5底面以下で検出された土坑である。出土物をFig.17に示した。45は弥生土器甕である。

堀立柱建物 (Fig.10・15)

調査では多くの柱穴が確認され、堀立柱建物もしくは竪穴住居の主柱穴を復原することができた。しかし、中世後半期の造成や後世の削平が著しいため、建物なのか住居柱穴なのかは判断できない。Fig.15に復原できた遺構について示した。柱穴間は1.4mから2.1mの間で幾つかのグループ分けが可能であり、この差は時期差によるものと考えられる。

溝遺構 (SD01・07 Fig.10)

調査区中央部で検出された段落ちで、ほぼ東西方向に走る地形変化の痕跡である。SD01範囲では直線的に比高差40cm程度の段落ちとなり、SD07範囲では弧を描くように段落ちが続く。周辺調査区においても地形に沿うような段造成や溝遺構などが確認されており、中世後半期の居館整備に行われた地形変化の所産とみることができる。この段落ちからはFig.17の36のような瓦も出土している。

井戸遺構

SE97 (Fig.10)

調査区北端部で検出された井戸遺構で、井筒などの主体は調査区外に位置する。調査では直径3m以上を測る堀方南半のみを対象としたにすぎない。出土物をFig.17に示した。37は中国陶器甕、38は白磁玉縁碗、39は白磁碗、40は黒色土器椀、41は白磁碗であり、中世前半期の井戸遺構である。

V 1643 比恵遺跡群第149次調査 (HIE149)

1. 調査に至る経緯

平成28年9月30日付で福岡市博多区博多駅南4丁目123-I地内における埋蔵文化財の有無についての照会を受理した（事前審査番号28-2-548）。これを受けて、埋蔵文化財課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群の範囲に含まれていること、申請地隣地で比恵遺跡群第146次調査（調査番号1618）等の発掘調査が実施されていることから、予定されている社屋建設工事による埋蔵文化財への影響は回避できないと判断されたため、工事が行われる範囲については記録保存のための発掘調査を実施することとした。発掘調査は条件整備の整った2017（平成29）年3月1日に着手し、同年3月31日に終了した。

2. 調査体制

発掘調査にあたっての組織は以下の通りである（平成28年度）。

調査委託	東機械株式会社	教育長	星子明夫
調査主体	福岡市教育委員会	課長	常松幹雄
調査総括	福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課	調査第2係長	加藤隆也
調査庶務	埋蔵文化財課 管理係	調査第2係	横田忍
調査担当	埋蔵文化財課	調査第2係	荒牧宏行

なお、平成28年度から埋蔵文化財調査課と埋蔵文化財審査課は、組織改編により埋蔵文化財課に統合されている。

3. 調査の記録

比恵遺跡群第149次調査地点は、比恵遺跡群の包蔵地範囲の中央部付近に位置する。北側隣地では第146次、道路を隔てた南側区画では第5・20次、北東側区画では第89次、東側区画では第16・17・123次調査等が実施され弥生時代から古代にかけて濃密に分布する遺構群が検出されている。



Fig.18 比恵遺跡群第149次調査地点位置図 (S=1/1,000)

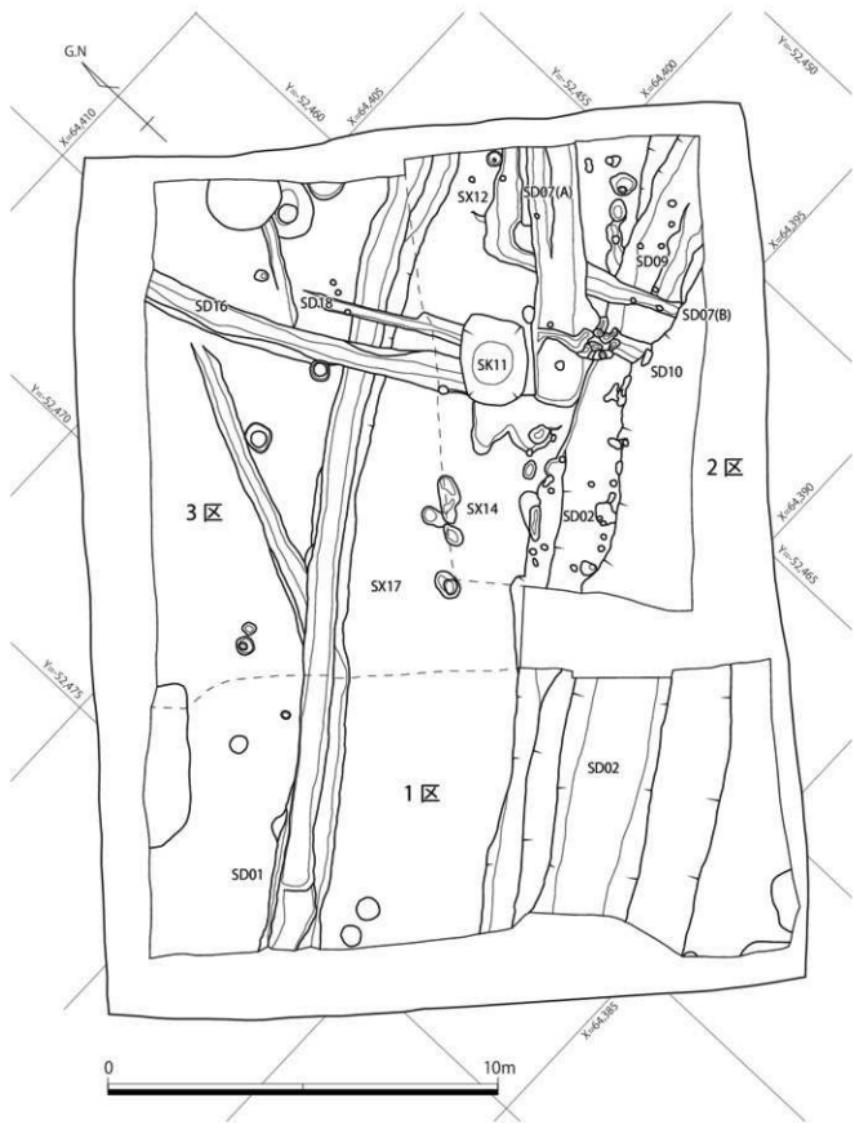


Fig.19 那珂遺跡群第158次調査地点位置図 (S=1/125)

現地表面の標高は6.8m程度で、遺構面となる鳥栖ローム層面の標高は5.5～6.0mを測る。調査で検出された主な遺構として柱穴のほか8世紀代の溝遺構1条と昭和初期の区画整理以前まで存続していた水路等である。調査は廃土処理の都合から三分割し、南西側を1区、東側を2区、北側を3区として順次作業を行った。

水路（SD02）は幅2.7m、確認面から底面までの深さ90cmを測り、断面形は逆台形となる。昭和初期の地形図から比較的規模の大きい幹線水路であったことが分かる。8世紀代の溝遺構（SD01）は幅60cm、検出面から底面までは深さ40cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。この古代と現代の溝はほぼ平行して字境付近を北東方向から南西方向へ延伸するもので、水路が連絡と築かれ維持されてきたことを示している。この現代水路を境に北西側のローム層は40cm程度低くなる。一段下がった範囲の土層堆積状況から中世後半期から近世にかけて水田等の耕作地として開墾されたことが分かる。この開墾による地下げにより、この範囲についてはそれ以前の遺構は削平を受けて消失しているため、遺構としては柱穴がわずか2基検出されたのみである。調査ではコンテナケース12箱分の弥生土器や土師器、須恵器などが出土した。

遺構と出土遺物

SD01 (Fig.19・20)

調査区を北東から南西方向にかけて縦断する溝遺構である。検出面での幅は60cm、検出面から底



Ph.23 1区全景（北東から）



Ph.24 2区全景（南西から）

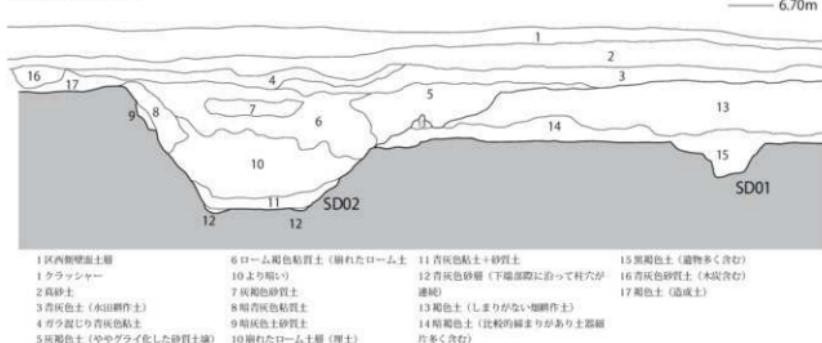


Ph.25 3区全景（北東から）

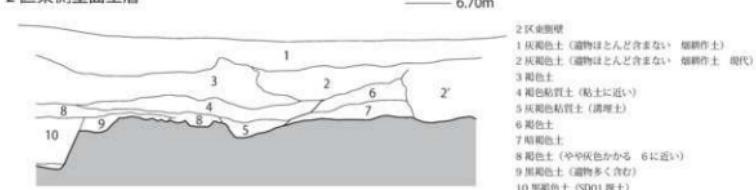


Ph.26 SD02上層（北東から）

1区西側壁面土層



2区東側壁面土層



2区南側壁面土層



3区北側壁面土層

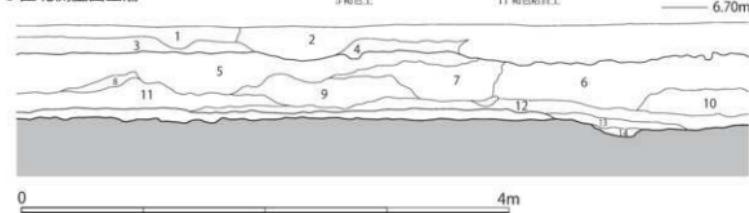


Fig.20 比恵遺跡群第149次調査 土層断面実測図 (S=1/40)

面までの深さは40cmを測り、断面形は逆台形を呈する。出土遺物から8世紀代の溝状遺構と考えられるが、第149次の西側に位置する第113次や第146次調査でも同一の溝状遺構の延伸部が確認されている。第113次では7世紀後半、隣接する第146次調査では黒色土器や白磁碗等が出土することから12世紀代まで存続することが確認されている。遺構の掘削時期は明確ではないが、8世紀代から12世紀代まで長く存続していた可能性が考えられる。

出土遺物をFig.21に示した。

1は須恵器壺口縁部片である。色調は黒灰色を呈し、口縁部下に自然釉がかかる。2は中層から出土した須恵器壺口縁部片である。3は中層および下層から出土した須恵器長頸壺胴部片である。4は上層から出土した土師器椀高台部片である。5は古式土師器甕口縁部片である。6は弥生土器広口壺口縁部である。口縁部内面に横位の刷毛目調整痕が残る。7は弥生土器高環脚部片である。内外面とも摩滅を受け調整は失われている。8は古式土師器の高環脚部片である。环部及び脚端部は欠失している。9は土師器高環脚部片である。色調は橙色を呈する。10は弥生土器甕口縁部片である。小破片であるが、甕棺墓に使用されたもので調査区周辺から流入したものと考えられる。11は弥生土器壺底部片、12・13は弥生土器壺底部片である。14は弥生土器甕底部片で外面に縱位の刷毛目調整痕がわずかに観察できる。15は弥生土器高環脚部片、16は弥生土器壺胴部片である。出土した弥生土器の多くは中期末から後期初頭にかけての時期に属し、周辺の遺構から流入したものである。

17は黒曜石製石鏃である。先端部及び片脚の一部が欠損する。18は黒曜石製石核である。自然面が残るが打面調整を丁寧に行っている。縄文時代晚期か。



Ph.27 SD02土層（北東から）



Ph.28 2区南東隅SD09付近



Ph.29 2区東壁SD02, SD07, SD09付近



Ph.30 3区北壁SD16付近（東から）

SD02 (Fig.19-20)

調査1・2区南側で検出された溝遺構で、昭和初期の区画整理事業まで使用されていた幹線水路である。SD01とほぼ並行するように掘削されており、調査区周辺ではこの方位区画が古代以降存続していたことがわかる。前述したようにSD01・02の北西側は一段下がる地形となっており、地形変換線付近に溝が掘削され運用されたものと考えられる。埋土からは弥生土器片・陶磁器片などが出土するが、いずれも混入した資料である。

出土遺物をFig.21に示した。19は中層の灰色土から出土した弥生土器甕口縁部片である。20は弥生

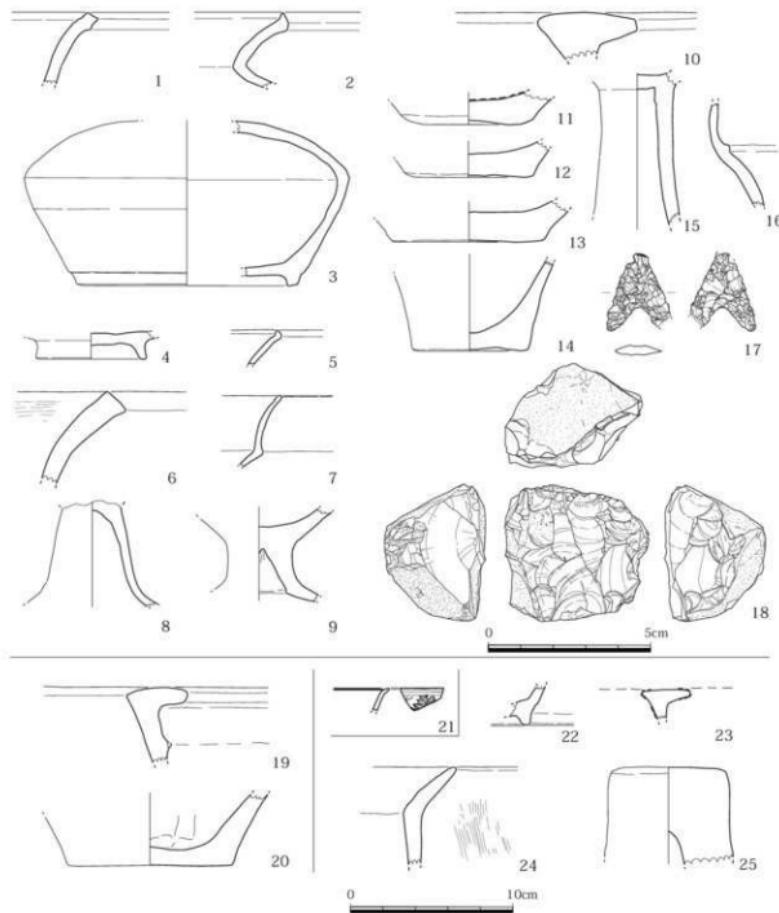


Fig.21 比恵遺跡群第149次出土遺物実測図 (S=1/3, 17・18は2/3)

土器底底部片である。内面底部付近に指頭圧痕とナデ調整が観察できる。

その他の遺構と遺物 (Fig.21)

調査ではコンテナケース12箱分の遺物が出土したが、調査区全体の年代觀を示すため出土遺物の一部を説明する。21はSD06出土の明代の染付碗である。22はSX17出土の土師器碗の高台部片である。摩滅が著しく近隣からの流入資料である。23はSX17出土の弥生土器甌口縁部片である。24はSX17下層出土の土師器甌である。外面に縦位の刷毛目調整痕が残る。25はSX17上層出土の器台である。上端部は平坦に整形される。色調は灰茶褐色から灰橙色を呈する。出土遺物の多くは摩滅により器面調整が失われている。

4.まとめ

比恵遺跡群第149次調査で検出された昭和初期まで存続していた水路と8～12世紀代の溝

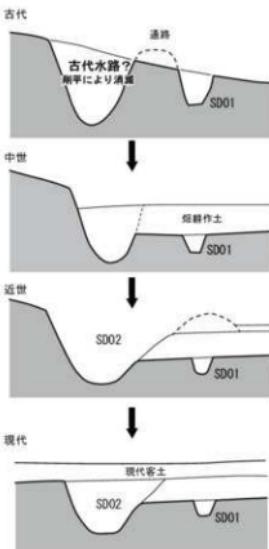


Fig.22 第149次 土地利用変遷模式図



Fig.23 比恵遺跡群第149次調査地点位置図、昭和初期 (S=1/2,000)

遺構が平行している状況から、古代の時期から字境に沿って水路・区画溝が掘削され長期間維持されていたことが判明した。また、溝遺構を境に南北で土地の利用方法が異なることが堆積状況の観察より判明した。溝遺構より北東側は水田などの耕作地として利用されていたが、最終的な水田整備はSD02が掘削された近世の段階と考えられる。調査地点の土地利用を時系列に想定復原したのがFig.22の土地利用変遷模式図である。調査地点付近の調査成果およびローム層の観察状況から第149次調査地点の北側には窪地状の地形が存在しており、古代の溝SD01や現代まで続く近世の用水路SD02はこの窪地の南側上端部を巡るよう掘削された可能性が考えられる(Fig.23参照)。また、隣接する第146次調査や本調査の遺構面である鳥栖ローム層を見ると、北側方向でローム中層以下の堆積状況が確認され、溝遺構を境に一段下がった地形は水田開墾等の人为的な地下げ事業に起因するものであることが分かる。最初の水田開墾のための造成がどの段階で行われたものは不明であるが、小さな谷地形をうまく利用していたことが確認できた。

SD02	SD02a,b	福岡市埋蔵文化財調査報告書 中南部12 比恵遺跡群第138次・149次、那珂遺跡群第158次調査の報告							
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間		調査面積	調査原因	
調査開始	調査終了								
ひえせきん 比恵遺跡群（1513 138次）	はかひさんぐん 博多区山王2丁目44番3,45番	40132	0127	33°34'44.61"	130°26'2.98"	2015.6.29	2015.9.9	303	共同住宅建設
なっかせきん 那珂遺跡群（1529 158次）	なっかせきんぐん 博多区那珂一丁目49番	40132	0085	33°34'18.46"	130°26'11.50"	2015.11.15	2016.1.15	231	共同住宅建設
ひえせきん 比恵遺跡群（1643 149次）	はかひせきん 博多区博多駅前4丁目123-1	40132	0127	33°34'45.61"	130°25'45.74"	2017.3.1	2017.3.31	97	社屋建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
比恵遺跡群（1513 138次）	集落跡	古代・中世	溝・土坑	土師器・須恵器・陶磁器等	
那珂遺跡群（1529 158次）	集落跡	古墳・中世	竪穴住居・土坑	土師器・須恵器・陶磁器等	
比恵遺跡群（1643 149次）	集落跡	古代・中世	土坑・流路	弥生土器・土師器・須恵器等	



福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1437 集

中南部 12

比恵遺跡群第 138 次調査(調査番号 1513)

比恵遺跡群第 149 次調査(調査番号 1529)

那珂遺跡群第 158 次調査(調査番号 1643)

2021

福岡市教育委員会